

〈書く女〉の誕生

— 『台湾愛国婦人』掲載小説・尾島菊子「幼きころ」 —

下 岡 友 加

【キーワード】尾島（小寺）菊子、「父の罪」、女性作家、自己表象、〈外地〉刊行雑誌

はじめに

尾島（小寺）菊子（1879—1956）は、「大正期を代表する女性作家として、田村俊子、水野仙子と並び称された存在」（小林裕子¹）である。

しかしながら、菊子に全集はない。近年、金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集』全三巻（桂書房、2014.2）の刊行により、ごく一部とはいえ、菊子のテキストをまとまった形で読むことが可能となった。ただし、「作品総数が580編以上にものぼる」（金子幸代²）という菊子の著作に対し、研究の成果は未だ乏しいと言わざるを得ない現状である。

本稿がとりあげる「幼きころ」は、日本統治初期台湾で発行された愛国婦人会台湾支部機関誌『台湾愛国婦人』に断続的に掲載された（第52～54、56～59、61、63、64、66～68、70、73巻、1913.3～1914.12）長編小説である。初出誌が稀覯本であったため、2014年、平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』（研究代表者・上田正行、2014.2）にその小説本文の大凡が翻刻された。さらに、2018年、奥州市立斎藤實記念館にて新たな掲載巻が発見され、今日ようやく全文を読むことが可能となったテキストである。

菊子は与謝野晶子、長谷川時雨、国木田治子らとともに、『台湾愛国婦人』に重用された女性作家の一人であり、この〈外地〉発行の女性雑誌に多くの寄稿を行っている³。稿者は以前、拙稿『『台湾愛国婦人』掲載新資料—尾島菊子「蚊ばしら」翻刻・紹介』（『広島大学大学院文学研究科論集』第77巻、2017.12）において『台湾愛国婦人』掲載の尾島菊子の著作一覧を掲げたが、奥州市立斎藤實記念館所蔵巻の内容を踏まえて⁴、下記の通り、一覧を改める。

第39巻（1912.2）評論「職業に就く婦人」、小品文選

第40巻（1912.3）小説「親子」、小品文選

第41巻（1912.4）訪問記事「春の化粧法に就て」、随筆「移転の記」

第42巻（1912.5）記事「流行の衣装」、小説「黄昏」、小品文選

第43巻（1912.6）小説「狂犬」、小品文選

- 第45巻 (1912.8) 小説「媒介」
- 第46巻 (1912.9) 評論「女子の独立問題」、小品文選、小品文「袖」
- 第47巻 (1912.10) 随筆「帰郷の感」
- 第51巻 (1913.2) 小品文選、小品文「郊外の家」
- 第52巻 (1913.3) 小説「幼きころ」前編一～一〇、小品文選
- 第53巻 (1913.4) 小説「幼きころ」前編一一～一四、小品文選、小品文「試験」
- 第54巻 (1913.5) 小説「幼きころ」前編一五～一九
- 第56巻 (1913.7) 小説「幼きころ」前編二〇～二三、小品文選、小品文「小品四種」
- 第57巻 (1913.8) 小説「幼きころ」前編二四（前編終）、小品文選、小品文「子犬の行衛」「イギリスの友に」「隣の赤ちやん」
- 第58巻 (1913.9) 小説「幼きころ」中編一～五、小品文選
- 第59巻 (1913.10) 小説「幼きころ」中編六～一〇
- 第60巻 (1913.11) 感想「五年に五度の転居」（テーマ「回顧五年」）、小説「蚊ばしら」、小品文選
- 第61巻 (1913.12) 小説「幼きころ」中編一一～一五、小品文選、小品文「秋雨の朝」「文展」
- 第62巻 (1914.1) 小品文選
- 第63巻 (1914.2) 小説「幼きころ」中編一六～一九
- 第64巻 (1914.3) 小説「幼きころ」中編二〇～二三（中編終）、小品文選、小品文「手術」「よろこび」
- 第66巻 (1914.5) 小説「幼きころ」後編一～三、短文選
- 第67巻 (1914.6) 小説「幼きころ」後編四～六、短文選
- 第68巻 (1914.7) 小説「幼きころ」後編七～九、短文選、短文「栗林」
- 第69巻 (1914.8) 短文選
- 第70巻 (1914.9) 小説「幼きころ」後編一〇～一二
- 第71巻 (1914.10) 短文選
- 第72巻 (1914.11) 短文選、短文「湯本湖畔より（日光にて）」
- 第73巻 (1914.12) 小説「幼きころ」後編一三～一五（終）
- 第74巻 (1915.1) 短文選
- 第75巻 (1915.2) 短文選
- 第76巻 (1915.3) 短文選
- 第77巻 (1915.4) 短文選
- 第79巻 (1915.6) 短文選
- 第80巻 (1915.7) 読者文芸選

※第41巻訪問記事「春の化粧法に就て」は「きく子」、第42巻記事「流行の衣装」は「菊子」、第80巻読者文芸選者は「尾島菊」、その他の著作についてはすべて「尾島菊子」の署名である（第68巻目次には「小寺菊子」とあるが、本文では「尾島菊子」と記されている）。

『台湾愛国婦人』には菊子の師である徳田秋声も小説「波の戯れ」（第56～64巻、第60巻を除く。1913.7～1914.3。計8回）を連載しているが、断続的とはいえ、一年九ヶ月・計15回（巻）に渡る菊子の「幼きころ」は、『台湾愛国婦人』（1908.10～1916.3）全88巻中でも最長の連載小説であった。雑誌運営の協力者であり、寄稿者でもあった博文館理事・坪谷水哉は「読者を繋ぐ為に数号に連なる面白き読物一篇あるは宜しきも、近頃の如く徳田秋声、尾島菊子二氏の小説の何れも長く続くことは亦一考を要すべし」（「本誌に対する緒名家の感想」『台湾愛国婦人』第63巻、1914.2）と苦言を呈しており、そうした声に配慮してか、「幼きころ」は同巻（第63巻）より、それまでの扉付きの附録小説欄ではなく、通常の文芸欄掲載に配置換えされた。しかし、同時代の他の読者からは「近頃台湾愛国婦人雑誌中で先づ読者の目を引くのは尾島菊子の幼き頃の記事ならん徒らに虚栄を夢み非道に誘惑されんとしつ、ある浦若き婦女子に是非一読させたきものなり（女の母）」（『台湾日日新報』1914.6.29）との評価も寄せられていた。

「幼きころ」は父の罪に起因する家庭の不幸を発端として、数々の苦難に見舞われながらも、最終的には係累を背負っての自活の道を決意する、若き女性「私」＝戸沢清子の半生記である。「菊子の作品で、何といつても優れてゐるものは彼女の前半生の過去を描いた、自伝的な一聯であらう」（塩田良平⁵）との評価が既に存するが、「幼きころ」はその「一聯」に連なる、或いはそれらの内容の集大成とも言つてよいテキストと見なされる⁶。（他のテキストとの関わりについては、論文末尾【表1】「幼きころ」構成表を参照されたい。）

本稿は「幼きころ」同様の設定を多く持つ、菊子の出世作「父の罪」⁷（『大阪朝日新聞』1911.3.22～6.10、のち単行本『父の罪』辰文館、1911.10）との比較を行いながら、最終的には〈書く女〉の誕生を導き描くためにある、「幼きころ」の方法の具体をつまびらかにするものである。

一 女に学問は必要ない？ —— 「父の罪」と「幼きころ」の間

平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』（研究代表者・上田正行、2014.2）に小説本文の大凡が翻刻された後、いち早く「幼きころ」を論じた三浦穂高は「父の罪が、作家菊子の一つの主題である」ことを踏まえた上で、同じ主題を持つ「父の罪」や短編「河原の対面」（『文章世界』1915.4）が「父の罪状」を「ある程度明確に語るのに対し、「幼きころ」には「父の罪の事情に関する言及が一切見当たらない」ことを指摘した。そして、それは「幼きころ」の「主眼が、父の罪そのものに置かれるのではなく、それによっ

て運命を翻弄される主人公に置かれていた」ためとする。すなわち、「幼きころ」前編第六章までは「私」の辛い境遇は父の罪のみによって生み出されてゆくものであったのが、次第に旧思想の祖母、頼りにならぬ母、といった様々な要素が複合し、「私」の運命を翻弄してゆく」と小説の展開を把握する⁸。首肯できる指摘と言えよう。

ただし、「父の罪」との比較のなかで、さらに付け加えておきたいのは、同じ「辛い境遇」に置かれているはずの両テキストにおける、主人公にとっての学校・学問の位置づけの差異である。「幼きころ」では、母の看病でしばらく学校を休んだのを機に『清や、お前は女の事だからさう学問などする必要がない、これでもう学校は退つておしまひッ』（前編・一四。漢数字は章番号をあらわす。以下同様）という祖母の言により、「私」の高等小学校三年中途での退学が決定された。それは、県下の女生徒中で唯一人、県知事から特別優等生として褒状を貰うような「私」にとって、「殆んど死刑の宣告にも似たる、惨酷な命令」（前編・一四）であった。事実、この退学は「私」が初めて自殺を考える動機となった（「幼きころ」において「私」は三度自殺を企てており、加えて家族を皆殺しにした上での自殺にも思い至ったことがある）。

『あゝ、私は何の為にこんな家へ生れて来たらう？お父さんも怨めしい、お母さんも怨めしい！私はもう寧ろ死んで了はう！さうだ、死んで了ひませう！生きてみたつて、どうせお父さんのために世間中の人に余計な気兼ね苦勞をして、何一つ面白い楽しみもなく、お加之に学校すらもやうやう高等三年で退げさせられるやうな、そんな、そんな家にオメ〜生きてみたつて何になる？生きてゐればゐるほど耻を搔くばかりだもの、あゝ寧ろ私は今夜××川へ身を投げて死んで了ふ！』（前編・一五。下線は稿者に拠る、以下同様）

「私」は結局「少女の身として唯ひとつの希望を齎らした学びや」（前編・一六）を離れて、お針の稽古に通わねばならなくなるが、「唯もう学校へ行きたい学校へ行きたいと思ひつゞけて」（前編・一七）いた。中編では東京へ出た「私」は従姉の家から女学校に通いはじめたが、父の死後、再び退学を余儀なくされた。よって、後編で自活を考えた「私」の書く履歴書は「なんの学歴もない、貧弱な履歴書」（後編・六）と語られる。「少なくとも、高等女学校程度の教育を受けてゐないものはない今の世に、私はまあなんと云ふ、可愛相なことでせうと、履歴書をかきながら、幾度込み上げる涙をふきましたか？」（後編・六）と「私」の嘆きは深い。「私」は「今更のやうに、学校教育の足りない身を恥かしく」思い、「口惜しさと無念さに搔きむしられ」（後編・七）、「若し私の望み通りに学問をさせてくれたなら、今頃は小学校の教師をしてもお針よりも好い報酬が得られたに違ひないと思つて、やつぱり旧式な習慣に囚はれた自分の幼き頃の家庭制度を呪つた」⁹（後編・一〇）。

このように、女性に学問は必要ないとする旧弊な祖母の考えと、それを絶対命令として、子の

意思や能力を尊重することのなかった親（家）の在り方は、「私」の希望と誇りを打ち砕いただけでなく、彼女の生きるための方途自体を狭めた原因とされている。「幼きころ」において学問、学歴の有無は女性の自立、職業問題に直結する、極めて重要な要素として位置づけられていることは明らかであろう。

対して「父の罪」では、どのように描かれていたか。「父の罪」と「幼きころ」との間には多く的一致点がある。まず、主人公・雪枝（「幼きころ」では「私」＝清子）は富山（「幼きころ」では「北の国」）の素封家に生まれながら、父の捕縛により零落の憂き目に遭っていること。また、その父の罪により、郷里の医学士との結婚が破約となったこと。主人公は東京へ向かい、元・小学校教師の叔母（「幼きころ」では従姉）の婚家に世話になること。監獄にいる父に一度面会するが、父は獄中死すること。叔母（従姉）の仕打ちに耐えられず、結局その家を出ること。実家を継ぐはずの弟の死により、一時帰郷するも、再び東京へ出て母や妹弟たちとともに自活の道を探ることなどである。その他、叔母（従姉）が自らの不貞のため、夫と離婚に至る点も一致している。以上のように多くの共通点を持つ「父の罪」と「幼きころ」であるが、学校や学問に対する考えは雪枝と「私」では大きく異なる。「父の罪」の雪枝の様子が次である。

『懲役人の娘!』と誰やら囁くやうな声がある。

『遺伝だよ、お前の祖父さんからお父様へ、それからお前達に伝はる恐ろしい遺伝だよ。』（42頁。引用と頁数は単行本『父の罪』（辰文館、1911.10）に拠る。以下同様）

(…)

斯うなつて来ると、最う勉強どころではない、女が勉強して愁じひの学者になつて見たとてそれが何になる？ 終生身を任する夫といふ者もなく、心を慰むる華かな恋をも知らず、唯学問にばかり凝つて、それで私は一生涯を果して満足して暮されやうか？（43頁）

(…) あ、^{あさま}浅猿しい猿^{「ママ」}浅しい、何といふまあ浅猿しい今日の父の姿であつたらう！ 私は彼父の子！ ^{あのおかい}彼赭色の獄衣を着た囚徒の娘である！

雪枝は今更に儂ない我が身を自覚した。何を望み、何を希うて此の先学問などする必要があるか？ つまらない、真実につまらない、明日からは最う学校も止さう、本も読ままい、然うして私は誰も人の居ない野原へでも行つて思ひ切り声を上げて泣きたい、所詮私は泣く為に生れて来たのである。（94～95頁）

上記のように、勉強や学問の無意味をいう雪枝の言は、父の罪ゆえに将来に希望を抱けず、苦しむ彼女の嘆きの一端としてある。しかし、「幼きころ」の「私」も同様に、『何だ、懲役の娘の癖に。』という「意地の悪い、同情のない声」（前編・六）に悩まされていた。そして、『あゝ明

日からもう学校へは来ない。』と考えつつも、「晴れ渡つた春の日も唯鬱陶しく室内に籠つて書物ばかりに親しんで居」(前編・六)た。「私」は退学後も「書物を読むことは依然としてやめ」(前編・一七)ない。「父の罪」とは逆の姿勢である。

また、「幼きころ」には、従姉の妹・お小夜の学歴についての記述もある。「私」は『お小夜さんは低能なのだ。』(後編・一一)と「憐愍の情」を抱いているが、お小夜が「^[ママ]今だに葉書一枚満足に書けないやうな女になつてゐるのは、全く姉の恒子の所為」だという。それは、恒子が国の師範学校にいた頃、附属の小学校へ通っていたお小夜の出来が悪く、一度落第した際、『あんなに落第などするやうな妹が学校にゐると、私が恥かしいから』とお小夜を退学させたからであった。お小夜は言う。

『私がこんな馬鹿になつたのは、皆姉さんの所為ですわ。何しろ尋常科さへもしまつてゐないので。あんまり酷いと思ひます。それにお母さんだつてさうですわ。いくら姉さんがそんな事を仰しやつたつて、他の小学校へでも入れて下さればいゝのに。』(後編・一二)

このお小夜の過去に関する情報は、小説では「私」の就職難に続けて置かれ、語られている。よって、「私」の場合同様に、受けるべき教育を受けられなかった女性のその後の惨めさを強調するエピソードとして機能していると言えよう(加えて、従姉・恒子のかねてからの横暴ぶりや恒子には甘い叔母の偏向を知らしめる役割も果たしている)。

このように、「幼きころ」には「父の罪」にはなかった、女性にとっての学校、学問の必要性を訴える主題があると考えられる。両テキストの間にはわずか二年の時間しか隔たりがないが、その間、『青鞥』の発刊(1911.9)があり、菊子も創刊当初には先輩格の女性作家として招かれ、寄稿も行ってた。この日本女子大学出身者を中心とする高学歴の『青鞥』同人たちとの交流や「新しい女」が社会問題として取り沙汰される同時代状況のなかで、学業の必要性について菊子も改めて考えさせられるところがあったのではなからうか。学びたい女性に学ばせない周囲の不理解が、当人をいかに傷付けるかという点については、「幼きころ」連載中に発表された、菊子の少女小説「綾子」(『少女画報』1914.1~7)にも同様に描かれており、問題は共有されていた¹⁰。

ただし、では学歴のある女性が豊かで幸福な人生を歩んでいるかと言えば、尾島菊子の小説においては必ずしもそのような表象がなされていないことにも留意しておく必要がある¹¹。「幼きころ」では、十分な学校教育を受けた女性として、師範学校を出て小学校教員をつとめていた従姉の恒子とその像にあたるが、むしろ問題の多い女性として描かれている。彼女が小説中で果たす役割について次に見る。

二 覚醒の言葉——女が女を貶めるとき

久米依子は、尾島菊子の少女小説の特徴を「敵役の女性の辛辣な台詞や主人公の嘆きをより緻密に再現して悲劇のテンションを高め、類似作のなかで一頭地を抜く存在になった」¹²と述べている。小説「幼きころ」においてもまさにその久米の指摘は該当する。「敵役の女性の辛辣な台詞」は小説では少女小説以上に、さらに「辛辣」さを増すかたちで展開された。

「幼きころ」における「敵役の女性」とは、「私」からすれば『『叔母さん』と云ひたいほどの年輩』（中編・一）の従姉の恒子である。彼女は当初、「私」を郷里から東京へと連れ出して家に置いてくれた「恩人」（中編・三）であり、東京へ来た当初は「私」のことを『『伶俐な娘』であると云つて、随分可愛がつてくれ』（中編・四）た。しかし「性来頗る強い癩癩持ち」（中編・三）である恒子は、「私」の父が獄死したことで郷里からの仕送りが途絶えると「私」に「お嬢さん気をはなれる」と言い、「私」は学校をやめて「家政にのみに逐使はれるやうにな」（中編・八）る。さらに、お小夜の子（美代子）の通院に付き添う際、「私」が医学生松木さんと話をする仲であることを知った彼女は『美代子の病気に託つけて、あなたは大学生と巫山戯て歩くんですね。怪しからん。あなたは一体何ですか？ よもや忘れはしないでせう。身分を考へなさい身分を。』（中編・一五）と責め立てて、病院への出入りを禁じる。また、恒子が養子に貰った富雄（俊雄）が発熱した際には「私」の「不親切」が原因であるとし、『あなたのやうな汚れた人、今夜中に出て行つておしまひなさい！』（中編・二〇）と放言する。さすがに我慢し切れなくなった「私」は書置を書いて、「昔から世の落伍者が轢死を企てる場所」（中編・二一）である後院殿下へ向かう。が、自殺を果たせず、芝の愛宕下に住む吉山夫婦のもとへと避難した。そこに届けられた恒子の手紙の文面には次のように書かれていた。

『恩を仇に報いるやうな女の行末こそ、大抵浅猿しく果つるに定まり居り候、鮮魚は濁水に棲まで、汚れたる父の子は矢張り汚れたる娘に候、徒に身を持ち崩したる結果、私生児でも抱へて門に立つが落なるべくと存じ候。』

手紙の内容に呆れた吉山夫婦は、もう恒子の家には戻らない方がよいと慰めてくれるが、それまで虐げられる一方であった「私」は、この手紙を読むことで漸く目を覚ました。『『私生児でも抱へて……』と云ふ文字を見ると、もう炎々と一種の反抗心が湧き立つて、どうしても豪くなつて見せる、犬死など決してしない、と此時に覚悟を極めた』（中編・二二）。「果して私生児を抱へて門に立つか否や、を見せてやりたい」（中編・二三）と恒子の言葉はその後の本文中で四度反芻、反問され、「私」の奮起の動因となっている。そして、二言目には父のことを持ち出し、「私」を蔑んできた恒子に対し、「父は社会的には悪人で愚人であつたかも知れませんが

ど、私達を思つてくれる情は、世間の普通の親とはちつとも変らなかつたらう」(後編・五)と反駁するに至る。「私」自身、父のことを怨み、父の子であることで長い間自らを卑下し続けていたが、恒子との対立のなかでその問題はもはや乗り越えられようとしている¹³。

また、あくまで自分の娘(恒子)を庇う叔母に対しても、「私」は『あゝ、まで粗末にされてはね、幾ら何でもさう〜黙許つちアゐられませんわ。(…)自分の精神一つで、私は屹度豪くなる事が出来ると思ひますもの。』(中編・二二)と主張する。

対する叔母は「鳥度不思議さうな顔」をして『女が豪くなるつてお前、どん〜学問でもしたら知らぬ事、どうして豪くなることが出来ますか？ 女の出世は良人に依つて定まるのぢやないかね。』『昔だつて今だつて、何も『女』と云ふ身分に変わりが無いものね。』とあくまで自身の常識を口にする。「私」は『その女と云ふ身分が大分変つて来てゐますよ。思想が新しくなつて来てゐますもの』と言ひ返し、「これまで責め苛められた社会の人々や、従姉の恒子に対する一種の復讐——と云つたやうな敵愾心に熱い血を湧かせて」、「無茶苦茶に読書に耽り」、ノートに何かしら「書いて書いて書きまく」(中編・二三)るようになる。すなわち、恒子という女性は、主人公を苛め抜く憎い「敵役」であると同時に、幼少期からあきらめることに慣れきっていた「私」の目を開かせ、自己確立をはかる変貌の契機を与える重要な人物であった¹⁴。

実は「幼きころ」以前から、菊子の小説では、この恒子の前歴であり、離婚後の職でもある女教師に対して、いったいによい表象がなされていない。たとえば、『文子乃涙』(金港堂、1910.4)では、文子が千葉で女教師をしていた二年間、「十人ばかりの女教師が少しも意見が合わないで」「一日も、お互いに打解けなかつた不愉快」(89頁)が語られている。また、「父の罪」では、「自分の叔母の政子といひ、恩師の道子といひ、今又此の錦子女史といひ、皆一貫した女教師的の口調！ 女教師の態度！ 女教師的の風采と云ふものがあつた。それを一緒にして一つの物に纏めて了ふと、唯淋しい影が残つた。雪枝は女教師と云ふものは、人の道を説く世の偽善者であると思つた」(240頁)とされ、別の箇所でも、『女教師！』／此の言葉だけで、雪枝は直ぐ、／『偽善！ 偽善者！！』／と云ふことを聯想する。政子のやうな教師こそは全く教育の仮面を被つた世の偽善者である——と思ふと、此方から顔を見るのも不快な気がした。」(291~292頁)と激しく批難されている。さらに、「ある夜」(『青鞥』1911.10)でも「小学校の先生や女事務員などになる位なら、芸者になつた方が増しよ。」という主人公・つぎ子の考えが示され、「頬紅」(初出タイトルは「残紅」『大阪朝日新聞』1912.5.18~8.16、単行本は春陽堂、1913.7)でも、主人公・静子は「唯でさへ女教師は嫌ひなのに、まだ夫のある時分から若い男となれそめて、到頭其の男と斯うして平然と恋の成功を誇つてゐるらしく装うてゐる女が傷々しかつた。」(単行本、303頁)と語る。「黄昏」(『台湾愛国婦人』一九一二・五)では、小学校教師・政子自身の口から自らを「人間の自然性に背いた苦しい仮面を被つてゐるものゝやう」と語らせている。

以上のような女教師に対する負の表象は、あくまで特定の人物から見た主観的な価値観の吐露

であり、客観的に見て根拠となる出来事に乏しく、偏見とも受け取れる表象にとどまっている。一方、「幼きころ」では、恒子の行動の逐一や「辛辣な台詞」が「緻密に再現」されているため、読者からすれば、彼女は疑いようのない〈悪〉の像である。他小説にも見られる女教師への嫌悪は、「幼きころ」では十分に根拠を伴うかたちで提出されていると言える。「私」の母からも「怖ろしい女におんななすつた」と指摘された従姉は、開き直って次のように自身の学歴を誇った。

『え、どうせ怖ろしい女ですよ。ねえ叔母さん、けれど、私はまだ、人の夫を横から奪はうとするやうな、そんな大それたことはしやしませんよ。私はこれでも、高等の教育を受けた女ですからね。清子さんとは少し格式が違ひますよ。』（後編・五）

前節で述べた通り、本人の意思に反して学びの機会が奪われたことは、「私」やお小夜を苦しめる原因となった。しかし、学歴があることが必ずしも品位や徳性、他者への思いやりを約束するとは限らないことも、恒子の振る舞いや発言を通じてテキストは明示する。

そして、この恒子が「辛辣な台詞」を吐けば吐くほど、「私」の抱く反抗心はより強くなるのが自然な成り行きであり、引き起こされた「私」の反発は、妥当なものとして読者に感受されることとなろう。「幼きころ」における、あくどいほどの恒子の暴言の数々は、ただに菊子の小説に共通する女教師への負の表象にとどまるのではなく、主人公に覚醒と成長を促す必然性、必要性を持つという点で、他の小説とは異なり、所を得て生かされている。

三 「捨てられた」女から〈書く女〉へ——主体性の獲得

「父の罪」は、すでにそのタイトルからして菊池幽芳「己が罪」（『大阪毎日新聞』1899.8.17～10.21、1900.1.1～5.20。単行本は春陽堂、1900.8、1901.1、7）を想起させるが、特にその結末の付け方に家庭小説の色合いが濃い。加藤武雄は、家庭小説の定義について「悲惨な事実を描くのは構はないとしても、どこかに救ひがなければならぬ」「結局に於て道德の勝利といふものが歌はれてゐなければならぬ」¹⁵と述べているが、「父の罪」では、最終的に主人公・雪枝の孤児院を設立するという希望がかなえられた。加えて、かつて雪枝を捨てて彼女に「何う考へて見ても男の心程的にならぬものはない」（二一章、253頁）とまで思わせた鳩村敏三が、その孤児院を訪ねて自身の過去を詫びに来る。「父の罪」における「救ひ」と「道德の勝利」の様相は明白である。また、貧乏極まっていた清藤（叔母の元夫）が「支那」に出向く際には生活に困窮する雪枝に百円の小切手を渡し、さらには彼女に求婚した上、炭鉱事業で成功して得た二千元という大金を送金してくるなど、特にテキスト終盤では雪枝にとって都合のよい、施しの展開が目につく。

対して、「幼きころ」はどうか。この小説は「父の罪」以上に登場人物が泣く場面が多く、いわば涙責めの小説であり、運命に受動的に翻弄され続ける女性主人公の登場という点では、依然

として家庭小説の典型的な型を持していると言える。ところが、後編一〇～一五章の結末部分では「私」は全く泣かなくなる。一度だけ叔母の子を思う情愛に「私」は「ホロリ」とさせられる（後編・一三）が、悲嘆の涙ではない。逆に最終章では、「私」に言い寄る松岡簾吉の方が、これまで送った手紙のすべてを「私」から返されて「涙含んでゐる」（後編・一五）。

前編の「私」は、父の二度の捕縛歴を承知の上で結婚を約してくれた速水医学士の破約（父の三度目の捕縛が理由）に対して、自身の思いを「口に出しても云へない、動作にも現はせない」まま受け入れ、「捨てられた」（前編・二四）。中編の「私」は周囲に勧められるがまま、結婚を前提に神戸の榊家へと出向くが、夫となる予定の直之助に冷淡に扱われたことを苦にして病気となり、自死すら考える。すなわち、「私」は父の罪に起因する不幸に泣かされ続けるのみならず、異性との関係においても常に「愛される」ことを要求しているのであり、どこまでも受け身の態度に終始していた。

後編に入っても、新橋駅に迎えに来てくれた松岡簾吉からの「熱烈な手紙の数が殖えるに従って一步一步引かれてゆく」（後編・三）「私」がいる。しかし、彼が宿を不意に訪問してきた際、「私」は「簾吉氏の同情をそれほど深く信じてはゐる」ず、「どうして、軽率な、浮薄めいた、一時的の人の遊びのやうな恋ごころに誘はれませうか？」（後編・四）と冷ややかな心を持って、もはや彼の言葉に動かされなかった。「私」は「世の男子達が家を持ち、妻を持つてからする、一家の経営とか、家族の扶養とか云ふ、大きな実際問題と戦つて、さうして、又自分自身の発展をも計つてゆかねばならぬ」（後編・四）ことを自らの課題として考えるに至っていた。後編に入って突如登場させられた感の強い松岡簾吉であるが、彼に対する「私」の態度から、異性に対しても変容した「私」の姿勢、独立心や主体性の芽生えが示されている。簾吉はそのために必要な男性（装置）であった。

なお、この松岡簾吉は養子の身分でありながら、養家の不貞な娘との結婚を嫌い、すでに一児をもうけた後にも「私」に言い寄るなど、「父の罪」の鳩村敏三と多くの点で一致した像である。（このことについては、論文末尾【表2】「父の罪」・「幼きころ」男性登場人物対応表を参照。）「父の罪」の雪枝は、鳩村敏三の甘言を一度は受け入れた後、彼に裏切られた。一方、「幼きころ」の「私」は松岡簾吉の好意に「心から感謝することの出来ない自分自身」（後編・四）を見出し、彼に應えることはなかった。その代わりに、独逸留学に旅立った医学士・松木さんの三年後の帰国を待つという新たな結末が設けられている。〈待つ女〉であるという点では、やはり受動的な在り方にも見えるが、「私」は少なくとも「松木さんと結婚しやうなどは考へてゐない。「幼きころ」の末尾が次である。

暗鬱な思ひがしみ〜と迫つて来るのでした。併し、私は到底松木さんと結婚しやうなどは考へてゐませんでした。私を可哀相だと云つて下すつた松木さんの同情が、永遠に

松木さんの心の中に生きてみてくれ、ばい、のだと思ひました。けれど、私はまだやつと廿を越したばかりの処女です。三年の後になつて松木さんがお帰りなさるまで、果して今の境遇が持ちこたへて行かれるかどうか分かりません。私の前途は真暗です。いつまでも闇です。明日はどうなる身か、それは自分にだつてわからないのでした。（後編・一五）

テキストは「明日はどうなる身か、それは自分にだつてわからない」と「私」の暗中模索のままに閉じられているが、この先の「私」に果たしてどのような自立の道が想定されているのか。従姉の手紙によって抑えきれぬ憤怒とともに目を開いた「私」は母に訴えた。『私はね、お母さん！ 何処からか自分の天分と云ふものを見出して、それを発表したいと思ひますの。そして世間から認めて貰ふまでは生命賭けで努力しやうと思ひますの（…）』（中編・二三）。さらに後編では「自分は文学家になつて身を立てやう——と云ふやうな、ある鋭い閃きに打たれ」、「つとめて少女時代の記憶から連想して、自分の感じた人生観を忠実に書いて見たい、と云ふやうなことを考へてみた」（後編・一〇）。

そして、小説の終局部では「従姉に自分の誇りを見せつけてやらねばならない」「従姉の不行跡を罵つてやらねばならない」と恒子への反発が変わらず示されつつも、「併し、私はそんな小さな反抗心のためにのみ生きるのではありません」とし、「私」は書くことを通じて「進むべき道を開拓」する意志を表明した。

私は下らない人間で終りたくないために、これからはどしどし自分を発展させなければならぬのでした。私は書きます。自分の腹の中に畳んである凡ての不平や、あらゆる懷疑を残らず発表しやうと思ひました。そして私は自分の思想を大胆に正直に誇張し虚飾も加へないで、綿密に書き綴らうと云ふことを考へました。さうした後で私は静かに自分の進むべき道を開拓しやう。自分の生きてゆく道！（後編・一四）

飯田祐子は日本近代文学における「女性作家の作品には、書く自己がなかなか現れてこない」¹⁶ことを指摘したが、「幼きころ」の「私」は実際に作家として立つまでには至っていないものの、〈書く女〉としての自身を上記のように宣言した。上記引用の言を踏まえれば、この「幼きころ」というテキスト自体が、「自分の腹の中に畳んである凡ての不平や、あらゆる懷疑を残らず発表しやう」という「私」の「考へ」のもとに書かれたテキストであると把握することもできる。加えて、テキスト末尾において「前途は真暗」（後編・一五）と語られた「私」の行方は、すでに作家として立っている、尾島菊子自身の現在をもって補完し、理解することが可能であろう。すなわち、「幼きころ」は、菊子という一人の〈書く女〉が誕生するに至るまでの軌跡を描いた「自己生成小説」（山口直孝¹⁷）として読むことができるのである。

「幼きころ」発表終了の翌年、野上弥生子は「恁こゝろな小説が欲しい」（『時事新報』1915.6.25）と
いうテーマに対し、次のように応えている。

どんな平凡な人間でも或一箇の人間が、一生のある場合、ある瞬間にその魂に受けたシヨツクを、忠実に純良に発表した思想なり、言語なりならば——即ちその刹那その人は偉大な天才になつてゐるのですから——きつと私達の胸に共鳴しないではおかぬ尊い響きを持つてゐるのだと思ひます。従つて私は人間はどんな人でも自分さへしやうと思へばえらい作物の一つだけは残して死ぬるものだと信じてゐます。それはその人の自叙伝であらなければなりません。¹⁸

「幼きころ」は弥生子のいう「その魂に受けたシヨツクを、忠実に純良に発表した」「自叙伝」として評価することのできるテキストである。そこでは、地方に生を受けた女性が望むような教育もあたたかい家庭環境も与えられぬまま、しかし、郷里や親族や社会によって損なわれ続けたがゆえに逆に作家として立つことを決心するに至るまでの過程が詳細に記録された。

「幼きころ」は〈外地〉で刊行された女性団体機関誌という掲載媒体の特殊性もあり、〈内地〉中心の文壇においては広く読まれる機会を持たぬ小説であった。しかし、菊子は自身の出世作「父の罪」を書き換えて、学歴にも男性にも頼らぬ〈書く女〉の誕生までを描いた。「幼きころ」は「作家尾島菊子を研究する上で欠くことのできない作品」（三浦穂高¹⁹）であるとともに、近代の女性が
大正初期にあらわした自己表象として見るべき稀有な資料の一つと位置づけられる。

おわりに

『台湾愛国婦人』第41巻（1912.4）には、短歌「病院にて」と小品文「花と女の聯想」が、第42巻（1912.5）には小品文「嫁」が、いずれも「尾島千代子」の名で掲載されており、これらは菊子の妹・チヨの執筆と見なされる。また、第44巻（1912.7）と第61巻（1913.12）には「ダリヤ」「柏木の雪」と題した「尾島則義」の口絵掲載があり、こちらは1916年に26歳（数え年）で結核死した菊子の弟の筆と考えられる²⁰。さらに、菊子の結婚前後には、夫・小寺健吉の口絵や感想も同誌には掲載されており²¹、『台湾愛国婦人』には明らかに菊子の縁故による寄稿・掲載が複数確認される。

「幼きころ」のような力作が〈内地〉の雑誌ではなく、『台湾愛国婦人』に寄せられた理由は、原稿料の良さも含めた、如上のような好待遇（雑誌とのつながり）によるものと考えられる。また、〈外地〉刊行の女性雑誌であればこそ、他者の評価を必要以上に気にすることなく、菊子の思いは「大胆に正直に誇張し虚飾も加へないで、綿密に」（「幼きころ」後編・一四）吐露され得たとも言えようか。〈内地〉とは異なる媒体の性格が「1920年代の女性表現への架橋となった先

駆的な女性職業作家」（吉川豊子²²）の一人、尾島菊子の前半生を総括するような小説を生んだ。

しかし、同時に忘れてはならないのは、『台湾愛国婦人』とは台湾総督府の植民地政策履行の後方支援を女性たちに求めるプロパガンダ誌に他ならないという事実である²³。愛国婦人会台湾支部の圧倒的多数を占める構成員は台湾人女性であったが²⁴、もとより、彼女たちには自己表象の機会など与えられてはいなかった。『台湾愛国婦人』の持する性格とそれが果たした役割については、多面的多角的な視座から、今後も慎重にはかっっていかなければならない。

註

「幼きころ」本文をはじめとする尾島菊子の著作の引用は断りのない限り、初出に拠った。ただし、旧字は新字に改め、ルビは原則省略した。

- ¹ 小林裕子「『職業作家』という選択—尾島菊子論」（新・フェミニズム批評の会編『明治女性文学論』翰林書房、2007.11）343頁
- ² 金子幸代「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究1—作品執筆年譜を中心に—」（金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集2 小説』桂書房、2014.2）509頁
- ³ 同誌と関わりの深い女性作家については、拙稿『『台湾愛国婦人』と女性作家たち』（『台湾愛国婦人復刻版 別冊 解題・総目次・執筆者索引』三人社、2020.11）参照
- ⁴ 『台湾愛国婦人』所蔵機関（巻）の詳細については、下岡友加・柳瀬善治編『『台湾愛国婦人』研究論集—〈帝国〉日本・女性・メディア—』（広島大学出版会、2022.3）10～11頁「『台湾愛国婦人』所蔵一覧表」参照。現在、京都・三人社から同誌の復刻版が刊行中である。
- ⁵ 塩田良平『新訂 明治女流作家論』（文泉堂出版、1983.10）353頁
- ⁶ 「幼きころ」の内容は、菊子の多くの短編小説や随筆へと分離して描かれている。このような内容の重複は、菊子による戦略的な自己剽窃というよりも、「幼きころ」が菊子自身の前半生の出来事を網羅するかたちで盛り込んだ小説であることを明かすものと見なされる。
- ⁷ 大阪朝日新聞社一万号懸賞文芸募集への応募作。田村俊子「あきらめ」につぐ次点。選者の一人・幸田露伴はこの小説に最高点をつけた（「新小説披露」『大阪朝日新聞』1911.3.21参照）。
- ⁸ 三浦穂高「尾島菊子研究における「幼きころ」の意義—主題としての家族と「新しい女」—」（平成26年度國學院大學大学院文学部共同研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究 本文篇・研究篇』研究代表者・高山実佐、2015.2）372～373頁
- ⁹ ちなみに、奥武則の調査に拠れば、1915年時点における「実科を含む高等女学校への進学者は同年齢人口の5.0パーセント」、1925年には「14.1パーセントにまで上昇」している（『国民国家』の中の女性—明治期を中心に— 鶴見和子他監修・奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考V 闘ぎ合う女と男—近代』藤原書店、1995.10）445頁。進学のかなわなかった

無念について、後年菊子は「私たちが高等小学校を終わったときに、その半数以上——否殆んど全部の生徒が誰一人としてもつとより以上の師範学校（当時私の国では女子師範しかありませんでした）へ行くか、或は東京へ遊学に出ることを望まないものはありませんでした。只彼女たちは家庭の経済的事情とか、又は古い〜頭脳を持つた退嬰の日本人気質から、女子に学問をさすことを嫌ふ周囲の圧迫を受けて、泣く〜家庭に引戻されてしまつたのでした。そしてどんなに彼女たちはそのことを不幸に思つて嘆き悲しんだか知れません。勿論私もその一人でありました」（『女学生たちへ』『美しき人生』教文社、1925.7。48～49頁）と記している。

¹⁰ 「綾子」の主人公・綾子は東京の女学校へ進学することが決まった友人を前にして、自分は女学校への進学どころか、「殊によると、此三月の試験きりで、学校を退かせられるかも知れない、と云ふ不安すら」抱いている。「家柄から云へば、自分の家の方がずっと立派であるのに、満足に学校へ通はせても貰へないと云ふ事がどんなに綾子さんを失望させてゐたか知れない」（一）。不安は的中し、三月の試験では綾子が一等の成績を取ったにもかかわらず、卒業と同時に綾子は学業はそれきりでお針の稽古に通わされる。学業優秀であるにもかかわらず、祖母の言に基づいて退学し、その後、お針に通う設定は「幼きころ」と全くの同様である。なお、『青鞥』発刊以前の菊子の少女小説「都の夢」（『少女界』1908.10）では、女学校入学のために上京した堀越清子が同居する叔母の様子を見て「女は学問すると彼様風になるものであらうか」との疑いを抱き、「此頃不図女の学問の是非を考へ出で候」と置き手紙を残して単身富山に帰郷する（進学を自ら放棄する）という内容が描かれていた。媒体の性格に合わせた物語展開とも考えられるが、「綾子」と好対照の内容であり、ここからも『青鞥』以前／以後の菊子のテキストの変化を見出すことができる。

¹¹ 「綾子」においても、「都会に出て学問する二人は屹度幸福であるか、それとも、このまゝ、無事にかうしてゐる自分の方が幸福であるか、無論わからないことだ」（七）と末尾は判断中止の文章で結ばれている。

¹² 久米依子『「少女小説」の生成 ジェンダー・ポリティクス of 世紀』（青弓社、2013.6）161頁

¹³ ただし、後編第八、九章では職を紹介してもらうことがかなわず、行き詰まった「私」は過去を振り返り、亡霊のような父の姿を思い浮かべて、今一度父への恨み言を口にして一人泣いている。父の犯した過ちは重たく、子に禍いし続けた。「私」が新たに自身の道を歩むことは決して簡単なことではないこともテキストには示されている。

¹⁴ なお、恒子のモデルは菊子の従姉にあたる樽井（浅井）フサと考えられる。

¹⁵ 加藤武雄「家庭小説研究」（山本三生編纂代表『日本文学講座第14巻 大衆文学篇』改造社、1933.11）60頁

¹⁶ 飯田祐子「女」の自己表象—応答性、被読性と田村俊子「女作者」（森本淳生編『〈生表象〉

の近代』水声社、2015.10）307頁

¹⁷ 山口直孝『「私」を語る小説の誕生 近松秋江・志賀直哉の出版期』（翰林書房、2011.3）における用語。山口は「芸術家になる道程を描いた教養小説や作品そのものの誕生過程が提示される」（17頁）小説と要約している。

¹⁸ 引用は『野上弥生子全集 第18巻』（岩波書店、1980. 9）40～41頁に拠った。

¹⁹ 三浦穂高（注8に同じ）368頁

²⁰ この弟が画才を持っていたことは、菊子の小説「青い灯」（『文章倶楽部』1916.7）などに描かれている。

²¹ 小寺健吉の寄せた画や文章は以下の通り。第46巻（1912.9）口絵「曲浦」、第56巻（1913.7）口絵「夏の海」、第59巻（1913.10）中扉、第60巻（1913.11）感想「あの子供はどうしたらう」（テーマ「回顧五年」）、第63巻（1914.2）口絵「早春」、第68巻（1914.7）口絵「甲州路」、第78巻（1915.5）口絵「文展出品」。金子幸代は1913年8月の時点で「菊子は画家の小寺健吉との結婚を想定していたのではないかと思われる」（『富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究3—メディアとの攻防・「ふるさと」観の変遷—』金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集3 随筆・評論』桂書房、2014.2、350頁）と指摘しているが、『台湾愛国婦人』への小寺の寄稿が1913年から盛んになることからしても、その可能性は高い。

なお、菊子が選者をつとめていた小品文の送り先の住所は、第62巻（1914.1）に「大久保百人町353」と記されている（183頁）。杉本邦子編「尾島（小寺）菊子年譜」『日本児童文学大系第6巻 与謝野晶子集・尾島菊子集・野上弥生子集・吉屋信子集』（ほるぷ出版、1978.11）以降、金子幸代による最新の年譜（注2に同じ、515頁）まで、菊子は1915年6月に「大久保百人町269番地より、同町329番地の新築の家に」移るとあり、こうした従来の年譜の情報とは異なる。353番地は結婚前、家族（母、妹、弟）と一緒に暮らしていた住所の番地であり、同町において少なくとも三度菊子は転居を行ったことになろうか。

²² 吉川豊子「解説」『「新編」日本女性文学全集 第三巻』（菁柿堂、2011.1）493頁

²³ 同誌の基本的性格については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格—プロパガンダ、そして近代文学発生の場として—」（『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、2010.2）参照

²⁴ 1915年末における愛国婦人会台湾支部会員数の構成は「内地人」8063人に対し、「本島人」70533人であった。大橋捨三郎編輯代表『愛国婦人会台湾本部沿革誌』（愛国婦人会台湾本部、1941.2）116頁参照

【表1】「幼きころ」構成表

編・章	私の年齢	内容概略	泣く人物	関連する他のテキスト (随筆含む)
前・一	五、六	父と七郎右衛門が取組みの喧嘩をし、戸沢家の門前に見物の人集りが出来る。父は巡査と一緒に出て行く		「父の罪」 (1911.3~6) 「河原の対面」 (1915.4) 「哀しき祖母」 (1921.10~12) 「父の帰宅」 (1933.4) 「悲しき私の過去」(1913.3) 「念仏の家」 (1934.12)
前・二		父は戻らず、夜中に母と祖父と祖母が土蔵へ入っていく		
前・三		巡査や役人が家の中や土蔵を調べる。捕らえられた父のため、母は毎朝、御馳走の弁当を下げて出かける	親類の叔母さん、私	
前・四		河原で労役する囚人の父を見る。母は監視の目を盗んで父へ大福餅を差し入れする	祖父、祖母、母、私	
前・五		隣の旅館のおつねさんには正直そうなお父さんがいるのを羨ましく思う		
前・六	七	家が売られる。小学校に入学した私は「懲役の娘」と苛められる。祖母と母は新旧思想の衝突で毎日のように争う	私	
前・七	(十)	三年経過のあいだに、末の弟と妹がジフテリアで亡くなる。父、出獄。零落のため、再び家売る	祖母、母、父、私	
前・八		貸家暮らしとなる。祖母と母の諍い激化、母が家出	母	
前・九		母の不在に苦しむ	私	
前・一〇		祖母に毎朝毎晩仏壇の前での読経を強られる	私、兄、妹	
前・一一		兄妹と相談の上、母を生家に訪ねるようになる	母、叔母、私、兄、妹、	
前・一二		母が家に戻り、女兒を出産。父が出奔、再び捕縛される	母	
前・一三		県知事から私に「学力優等、品行端正」の褒状が下る。大火で家を焼失	私、父、祖母	
前・一四		大阪控訴院へ移送される父を見送る。男児を出産した母は心臓病に罹る。私は学校を退学するよう祖母に宣告される	母、祖父、祖母、私	
前・一五	十三	退学させられることを悲観した私は自殺を考えて川へ赴く	私	
前・一六		私は憂鬱症となる。父は一年余りで無罪となり戻るが、私は学校へ復学できず、お針の稽古に出される	私、父	
前・一七	十四	お針の師匠が家を訪問し、私に養女の話を持ってくる		
前・一八	十六	養女や嫁入話はすべて壊れる。眼を患った私は速水医学士の元に通院する	私	
前・一九		速水医学士の診察へ行くことが私の何よりの楽しみとなる	速水学士の母、私	

前・二〇		速水医学士は私に求婚の意を伝える	私	「胸を躍らして都へ出る」 (1917.7) 「我故郷へ北陸の旅-2」 (1934.3) 「自伝の一節 我国最初の社会党 榊井藤吉氏の思ひ出」 (1933.12)
前・二一		兄が学校を退き、父と旅に出るも病気となって帰国。速水医学士との結婚の口約束が成る		
前・二二		兄が結核で死亡。父は再び旅へ出る。私は速水医学士との結婚を心待ちにする	兄、祖父、祖母、父、母、私、弟、妹	
前・二三		末の妹、祖父が死亡。結婚話は遅々として進まず、結納すら行われなため、私は病気となる	祖父	
前・二四	十七	祖母と母は相変わらず衝突する		
前・二五	十七	父が三度目の逮捕。速水医学士から破約の申し出。私は家を捨てることを考える	祖母、母、私、弟	
中・一	十七	従姉に連れられて、東京へ出る		
中・二		築地の吉山の叔母さんの元へ預けられる		
中・三	十七	従姉夫婦の家（笹井家）で暮らし始める		
中・四		笹井の叔父さんが監獄へ父に会いに行く		
中・五		従姉に連れられ、父に会う		
中・六		父に会うが、私は思うように話せない	父、私	
中・七		私は女学校へ入る。父は獄内で病死する		
中・八		私は女学校を退学し、笹井家の家政に使われるようになり、伯爵家の弟の息子に嫁ぐことが決まる		
中・九		許嫁となった榊家（神戸）で暮らし始める	榊家の母様、私	
中・一〇		夫となる予定の直之助に冷淡に扱われ、私は病気となる	私	
中・一一		笹井の叔父さんが私を東京へ連れて帰る	私、榊家の母様	
中・一二		直之助は肺病で暮に亡くなる。田舎から従姉の母、夫を亡くした妹（お小夜）と妹の子どもが出京、同居を始める	私	
中・一三		お小夜さん再婚。お小夜さんの子（美代子）を大学病院へ通院させる中、医学生松木さんと親しくなる		
中・一四		松木さんへ恋心を抱く	私	
中・一五		従姉から病院へ行くことを禁じられる	美代子、私	
中・一六		元・笹井家の婆やが大学病院で患者の付添婦をつとめており、医学士となった松木さんのことを聞く	私	
中・一七		病院に婆やを訪ねる	私	
中・一八		松木さんに会って話をする	私	

中・一九		婆やを通じて松木さんから手紙と指輪が届く	私	「春の憂ひ」 (1916.4) 「死の幻影 自叙伝の一」 (1920.9) 「死の魅惑に」 (1926.4)
中・二〇		従姉に残酷な言葉を浴びせられた私は死に場所を求す	私	
中・二一		後院殿下の線路の傍で顔馴染みの巡査に会い、諫められる。吉山夫婦の住む芝の愛宕下へ行く		
中・二二		従姉の手紙を見て、私は反抗心に沸き立つ	叔母	
中・二三		弟が病死し、郷里に帰る。自分の天分を見出して発表したいと母に語る	私	
後・一	(二十)	老いた母に私は一緒に郷里を去ることを説く	私、母	
後・二		私は母や弟妹を連れて上京。新橋に松岡簾吉が迎えに来ている		
後・三		末の妹（八重子）の病が重たくなる。下宿屋に松岡が訪ねてくる	母、私	
後・四		松岡の同情の言葉に私の感情は動かされない	私	
後・五		従姉が訪ねてきて私を責め立てる	従姉、私、母	
後・六		女学校の校長に履歴書を届けるが、その妻に冷淡な扱いを受ける	私	
後・七		学校教育の足りない身を恥じ、弱者の身の上の原因として父の了見が間違っていたことを思う	私	
後・八		これまでの過去の経緯を思い出す		
後・九		過去の経緯を思い出し、亡霊のような父の姿を想起して、飢渴に迫る生活に対してどうすればよいかと泣く	私、亡父のまぼろし	
後・一〇		母と二人で仕立物に務めつつ、文章を書く考案をする		
後・一一		叔母が母に会いに来て愚痴をこぼす		「親子」 (1912.3)
後・一二		従姉の不節操から、笹井と従姉は離婚する		
後・一三		従姉は若い大学生と同棲を始める	叔母、私	
後・一四		私は風邪から床につく。末の妹（八重子）が死亡する		
後・一五	甘を超した	簾吉から届いた手紙を返し、以後の交渉を断る。松木医学士の独逸洋行を新聞で知り、帰国まで三年間待とうと考える	松岡簾吉	

【表2】「父の罪」・「幼きころ」男性登場人物対応表

「父の罪」	共通点	「幼きころ」
鈴木隆医学士	郷里での婚約者。主人公の父の罪により破約	速水芳太郎医学士
横山金次→富山の行商人の息子。主人公に一方的に恋慕		
鳩村（松崎）敏三→養父が服役。早稲田大学を卒業し、文学士となる	養子の身分。不貞な妻を嫌い、主人公に言い寄る。大学卒業後は新聞記者	松岡簾吉→笹井の叔父さんの友人の息子。私立大学の理济科を卒業
清藤亨→教育界の著述に従事。のち、「支那」に渡り、主人公に求婚、大金を送ってくる	主人公を可能な限りで庇護し、父の罪にも寛容。妻の不貞のため、離婚する	笹井の叔父さん→社会主義者
		榊直之助→結核のため、主人公にあえて冷たく対応
		松木さん→医学士となり、独逸へ三年留学

付記

尾島菊子の著作物については、奥州市立斎藤實記念館、函館市中央図書館、日本近代文学館、国立国会図書館、富山県立図書館における閲覧の便宜を得た。記して感謝申し上げます。

本稿は、JSPS 科研費 JP21K00265の助成を受けた研究成果の一部である。

The Birth of a Writing Woman

“Days of Childhood” (Osanaki koro) by Kikuko Ojima:

A novel in *Taiwan Aikoku-Fujin*

Yuka SHIMOOKA

**Key Words: Kikuko Ojima (Kodera), “Sins of the Father” (Chichi no tsumi),
female author, self-expression, magazine, overseas territory**

Kikuko Ojima (Kodera) (1879–1956) is an author who is known as one of the “three accomplished ladies of the Taisho period.” This article concretely explicates the themes and methods of the full-length novel “Days of Childhood”(Osanaki koro) (1913.3–1914.12), which Kikuko submitted to *Taiwan Aikoku-Fujin*, published in Taiwan when it was under Japanese rule.

While “Days of Childhood” shares many aspects with Kikuko’s representative “autobiographical” novel “Sins of the Father” (Chichi no tsumi) (3–6.1911), it also differs significantly in that a woman’s education is presented as an important element in her later independence and occupation. Moreover, there are examples of groundless negative statements about female teachers in Kikuko’s novels, but in “Days of Childhood,” a former female teacher can be said to play an important role as her stern words serve to facilitate a self-awakening in the main character. Furthermore, unlike “Sins of the Father,” the main character in “Days of Childhood” finally decides to become independent as a writing woman, making it possible to understand “Days of Childhood” as a self-referential text in which Kikuko herself reveals the process that led to the writing of the novel.

As *Taiwan Aikoku-Fujin* is a rare piece of literature, the very existence of the novel “Days of Childhood” was not unknown until recent years. However, this novel may be considered to be of an exceedingly high value because it is an excellent autobiographical novel by Kikuko Ojima, a pioneering female professional writer who became a bridge to the female expression of the 1920s.